

vol.62 2025 春号 源流からのたより

ぽたい!

源流のひとしずく

みんなで、
あらたな一歩

Key Word

- 心をくばること
- 川上村へのおもい、つながり
- 移動式防鹿柵の取り組み
- 水彩画で悠久の時を伝える
- そして、みんなで進む
- 感じ、学び、考え、行動する

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

森と水の源流館

奈良県吉野郡川上村大字迫1374-1
<https://www.genryuu.or.jp>

【配慮】

はい-りよ

〔名〕（スル）心をくばること。心づかい。

みよしのの

吉野の川の 川上は

大昔から 山が生きてた

川しもへ 世界へ

心を配ったのさ

こどもら みんな 元気に遊び

さあ 森のいのちと 歌声を

おくろうよ ここから

私の好きな、かわかみ源流学園になる

前の川上小学校の校歌（作詞…前登志夫、作曲…西浦達雄）。その三番の歌詞です。

「川下へ 世界へ」に続くのは、一番で「光を流したのさ」、二番で「力を与えたのさ」そして三番では「心を配ったのさ」と書かれています。

まさに源流から水とともに、光や力によって希望をとどけ、さらに流域を見渡し、いつもやさしくも強い心を配ることで、上下流の人々がつながることを頭に描きながら聴いていました。

さて、この『ぽたり』巻頭ページにおいては、2012年、第24号で坂口泰一前

事務局長との対談でバトンをお預かりし、その後第25号から毎号、このページの企画、執筆を担当してまいりました。時によってはその話題に最適な方をお願いをして書いていただくこともありました。この62号を最後に、私も次へとバトンをつなげていただくことになりました。これまでお目に留めていただいた方々は、心から感謝を申し上げます。

とはいえ、まだしばらくはこの財団や森と水の源流館に関して、何らかの役割を担わせていただくことになりそうです。が、未来に向かっては、次なる担い手の面々にどんどんつないでいくことが望まれますので、いったん節目となるこのタイミングでこの誌面の企画から外れることにします。今後このページがどのように変化し、発展していくか、私も楽しみにしたいと思います。

森と水の源流館の開設の年からここに

席を置き22年が経ちました。たくさんの方と出会わせていただき、さまざまなチャレンジをさせていただきました。うれしい評価もいただきましたが、お叱りの一つも忘れません。そのどちらにも大切だったこと、それは【配慮】に尽きると感じます。相手様のお顔を浮かべ、精一杯の準備をして事に取組む。「とりあえず、やったから、いいか」で止めることを最も嫌ってきました。「何のために、誰のために、どうなったらいいか。」こんな仕事だからこそ、それを追い求めず、いったい何を成果として、毎日を過ごすのであろうか？

先人たちは、川下へ、世界へ、どのような心を配ってきたのだろうか？ いま自分たちから配る心は受け止めてもらっているのだろうか？ どう思ってくれているのか？ 吉野川紀の川源流物語を未来へ編みつづけることは、それを考え続けることだと思います。



川上小学校校歌(YouTube)



森林環境保全促進
和歌山市議会議員連盟
会長

やまもと
ただすけ
山本 忠相さん



川上村に生まれる一滴は、吉野川・紀の川の流れとなり和歌山市へと届き、その水は35万人以上の市民のみなさまに利用されています。川上村は和歌山市の水源地となります。

森林環境保全促進和歌山市議会議員連盟では、森林が有する「水源かん養」「自然環境の保持」など、公益的な機能を持続的に発揮させ、和歌山市の水源地保護等を図ることを目的に、その前身から27年間にわたり活動されています。現在、その会長を務められる山本忠相さんにお話をいただきました。

さまざまな取組みで市民に広げる

川上村が企業・団体と協働で進める「未来への風景づくり」に加盟し、2016年度の植樹後から草刈りの手入れと、交流のための「ふれあいまつり」で毎年村を訪ねています。それより前から、和歌山市と川上村が結ぶ「吉野川・紀の川水源地保護に関する協定」にもとづく「和歌山市民の森づくり」を支える取組みや、森と水の源流館が開催する講演会などに

川上村へのおもい、つながり

は、いつも参加してきました。和歌山市内の小学校へ向け、森と水の源流館から出前講座を届けてもらう活動も続いています。同じく主に小学校に向け、人工林の間伐の必要性を伝えるメッセージ付きの割り箸セットを川上村から調達し配布してきました。

川上村には「川上宣言」があります。「かけがえのない水がつけられる場に暮らすものとして、下流にはいつもきれいな水を流します」など、これは相当な責任感を表現しているものだと思います。中流や下流の何十万人もの命にかかわることを上流の人口1,100人ほどの村が掲げて、村民が共有されている。決して簡単なことではないと思います。この源流のおもいを河口部のまちがどのように受け止めて、どのように表現をして返すことができるか。これから川上村との連携を強化し、お互いに支え合いながら、貴重な水源資源を守り続けていくことが、次世代への私たちの責務であると考えています。

命の源である水が生れる村とのつながりを 市民のみなさまに感覚的にとらえてほしい。

さらに加えて、今年度新しい試みとして、夏休み期間中に、和歌山市内の小学生と同伴保護者を対象に、森と水の源流館の入館料を全額支援するキャンペーンを行ったところ35名の市民の方に行っていたきました。

まずは、自分たちの命の源となる水の生まれるところの存在を知り、行ってほしい。難しく考えず、感覚として意識してほしいです。



「未来への風景づくり」(川上村旧白屋)活動後の1枚。
森林環境保全促進和歌山市議会議員連盟のメンバーが毎年訪れて、草刈りなどの作業に汗をかい

わたしたちの願い

川上村のような源流地域の豊かな自然を守りながら、持続可能なカタチで地域の発展を促進し、和歌山市と川上村が一体となって地域の魅力を発信していくことです。

理想は「こんなところにも川上村があった!」みたいな感覚です。たとえば、川上村の特産品の柿の葉寿司には海の魚であるサバが使われます。山村の保存食として定着してきた由来は有名ですが、昔は海側ではあまり貴重とされなかった魚も、山村に運ぶことで付加価値が付いたと思います。川の流れをいかして、筏で材木を運んだり、割箸にすることで間伐された人工林の木が端材になるまで活用されて、それによって山が健全に保たれてきたなど、自然の循環の中で人は生かされて、生業が成立してきたのではないのでしょうか。この循環に活力を取り戻すことができればよいと思います。そのためには、価格だけでモノを選ぶのではなく、自然や環境のことを知って選択する価値観を備えることも大切です。そのお手伝いができるような川上村との連携になることを願っています。



「ここにも川上村が!」市議会の入口に設置された看板には、川上村産の吉野杉を使用。



移動式防鹿柵の取り組み

— 健全な樹林を目指して —

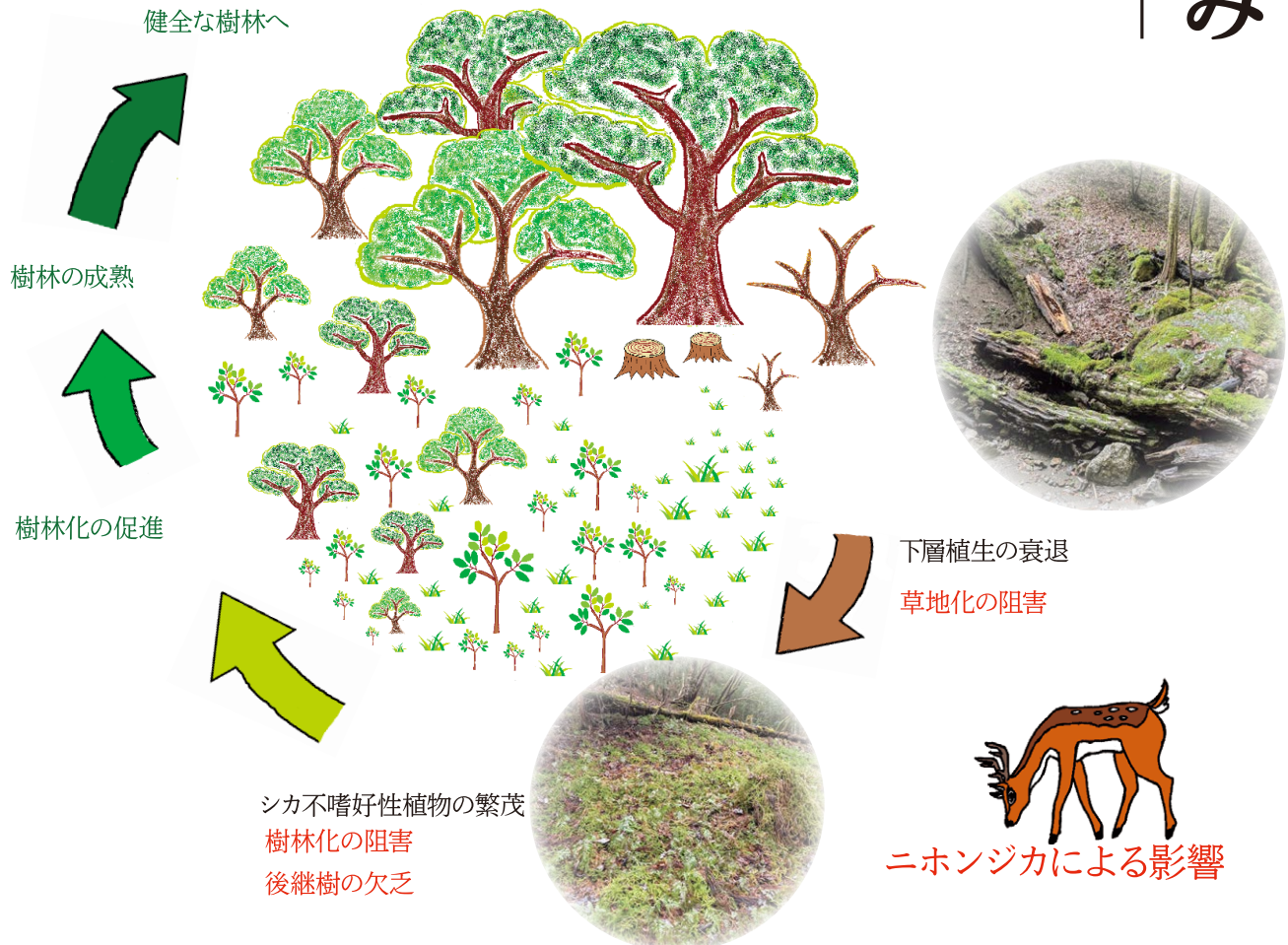
水源地の森の課題

それぞれの生きものが持つ役割が適切なバランスを保ってお互いに影響を及ぼしあうことで維持される生物多様性は、健全な森林の循環に欠かせない要素となっています。平成14年から令和3年までの間に実施した植物相、植生、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫類、水生生物、土壌動物の11項目の調査結果から、吉野川源流―水源地の森には446科2,236種の動植物が確認され、奈良県で記録されている動植物の約20%、重要種の約14%が生息する生物多様性に富んだ場所であることが示されました。しかし、希少な動植物が確認された一方、植物の重要種のうち36種と下層植生を利用する鳥類が未確認となり、林縁や草地の植物に依存する昆虫類の減少が見られるなど、ニホンジカの個体数増加によって森林の循環が阻害されている現状や、ハクビシンやソウシチョウなどの外来種の侵入といった課題が浮き彫りになっています。

ニホンジカの影響

有史以前より主要な狩猟獣として人の生活に恵みをもたらしてきたニホンジカは、法律によって捕獲圧を調整しなければならぬほど個体数を減らしていました。しかし、1980年代に入ると個体数は増加に転じ、それに伴い全国各地で森林への影響や農作物の被害報告が顕著になり、近年では交通事故の要因にも数えられています。

ニホンジカの個体数が適切であれば、下層植生を適度に採餌することで下草刈りの効果を発揮し、糞や死骸が栄養となって森林に還元されることで樹林更新を助長しますが、周辺樹林の環境変化によってニホンジカの個体数バランスが崩れた水源地の森では、過食の影響から従来の植生が維持できていない状態になっています。その顕著な例が下層植生の衰退で、平成15年から防鹿柵の効果を実証する下層植生調査を継続しています。



新たな課題 ナラ枯れ

下層植生の回復が課題となる中、ナラ枯れの蔓延が新たな課題として浮上してきました。40年ほど前から日本海側で顕著化し始めたナラ枯れは、ドングリを作る樹木にカシノナガキクイムシが侵入することで運ばれたナラ菌により、通水障害が生じて樹木が枯死する現象です。薪炭利用の減少によってカシノナガキクイムシの好む太さに成長したナラ類樹木の増加が原因の一つとされ、紀の川流域では令和2年頃から急速に拡大が始まりました。令和5年には、本来の生息地ではないミズナラの分布標高まで達し、水源地の森にも被害が及びました。水源地の森に生育するミズナラは、そのほとんどが大径木なので、ナラ枯れ跡に生じるギャップの早期回復が望まれますが、増加するニホンジカの食圧によって正常に行われない可能性が懸念されます。



水源地の森の健全化

下層植生は、生きものの生息場所を提供するだけでなく、雨滴の衝撃を緩和し、土壌に雨水を浸透させる役割や、その根によって土壌を抑える役割を果たしています。ニホンジカの過食圧は、これら水源涵養機能の低下を招くばかりか、不嗜好性植物の繁茂による植生の単一化、後継樹の欠乏を招き、森林の循環を阻害する要因につながります。このため、次の目標を定め、水源地の森の健全化を目指すことにしました、

下層植生の再生

土壌流出を防ぐとともに後継樹種の成長を促し、天然更新を促進させるため、持続可能な下層植生再生の手法を確立する。

在来種による樹林更新

地域固有の遺伝資源を保全するために、他地域からの種子導入は行わず、水源地の森に存在する埋土種子や自生株による樹林更新を目指す。

自然の力の上手な利用

樹林更新を阻害するような植生に変化した場合、防鹿柵を短期間開放して野生動物の食圧がかかるように誘導する。

ニホンジカの力を借りる

下層植生調査の結果から、防鹿柵の設置は下層植生の回復に効果的であることが証明されていますが、植生の管理が課題となります。手つかずの天然林の保全方針に基づき、人の手で植生管理を行うのではなく、ニホンジカが本来持っている生態系における役割を取り戻せるよう、食圧を利用した植生管理を行うことにしました。



移動式防鹿柵

ニホンジカの食圧を利用するためには、植生の回復度合いに応じて柵の開放または再設置を行わなければなりません。また、ナラ枯れ跡に生じるギャップを早期に回復させる目的があるため、枯死木の倒伏による破損も視野に入れた防鹿柵の設計が求められます。これらの条件を満たすため、小規模移動式が適しているとの判断に至りました。そして、ニホンジカの生態を調べていくと、立体構造にすることで柵内への飛び込みを軽減する可能性があることが示されています。そこで、高さ1m、幅2mの立体構造を併せ持つ簡易小規模防鹿柵を設計し、その運用を6月からスタートさせました。

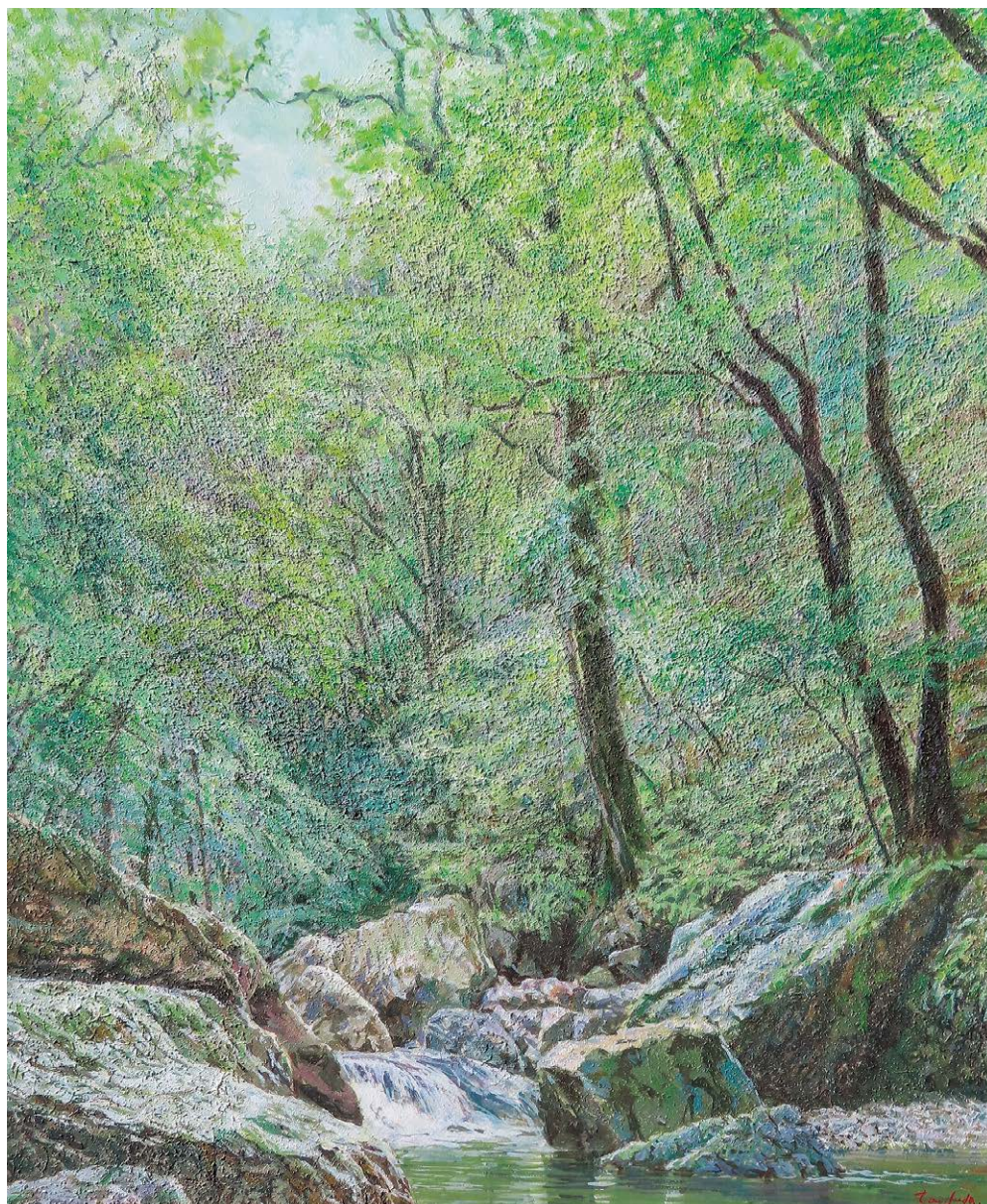
力を合わせて

様々な恩恵を森から受ける私たちも、森林生態系の一部なので、生きものたちと力を合わせて森のバランスを取り戻す必要があります。その第一歩として、皆様からお願いしたい森守募金を活用させていただきます。

天然林において立体型の防鹿柵や、ニホンジカの食圧を利用する森林再生の事例は先駆的なものとなります。この取り組みを単なる森林管理に終わらせるのではなく、皆様と共に水源地の森の元気を取り戻す活動として広げたいと思っていますので、是非ともご協力をお願いします。

参考資料

- ・ニホンジカ特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル 環境省
- ・階段式防獣網「シカガエシ」の実証実験 日緑工誌 39(2)276-280,2013
- ・ネット柵設置による牧場採草地へのシカ侵入防止効果 日本暖地畜産学会報35(1)27-31,2012
- ・飼育キウシュウシカ(Cervus nippon nippon)の発育ならびに跳躍力 鹿大農学術報告 第71号11-12,2021
- ・ナラ枯れ被害終息後の林分における更新の可能性と生物群集への波及効果 東北森林科学会誌21(2):60-65,2016
- ・ブナ林の天然更新完了基準に関する一考察 苗場山ブナ天然更新試験地のデータから 日林誌9(1)23-30,2012
- ・カシノナガキクイムシとその共生菌が関与するブナ科樹木萎凋枯死被害発生要因の解明を目指して 日林誌87(5)345-350,2005
- ・ナラ枯れの発生原因と対策 植物防疫9(5)928-31,2011
- ・ナラ枯れ被害対策マニュアル被害対策の体制づくりから実行まで 一般社団法人日本森林技術協会 平成24年3月
- ・ナラ枯れに強い森林を目指して 誘引捕殺資材を利用したナラ枯れ対策 岡山県農林水産総合センター森林研究所 2020年4月
- ・ナラ枯れ痕ギャップに設置された防鹿柵内外での更新状況の比較 日林誌9(1)21-25,2017



水彩画で源流の悠久の時を伝える

ともに
いいき輝く
活動をご紹介

須田 泰一朗さんと

水の風景を届ける

渓谷にある岩、そこを流れる水をモチーフに水彩画を描く須田泰一朗さん。源流の風景を求め参加いただいた水源地の森ツアーをきっかけに、源流人会に入会いただき、そのご縁で森と水の源流館ギャラリーへの展示に協力いただきました。また、大阪や神戸などで行われる絵画公募展に精力的に出展されており、御船の滝や高原川の風景が皆様に届けられました。須田さんとの出会いにより源流と都市部で、ともに自然の魅力を発信しあえる仲間の輪が広がる喜びを感じています。

表現への挑戦

その時間、空間の持つ個性に魅力を感じ、悠久の時の流れを経た岩と水の表情を絵で表現することに挑戦したいと思ったことが、川を描くきっかけとなった須田さん。その作品からは、「岩周りを絶えまなく流れる水」「大地の移りゆく時の流れ」「光により刻々と表情を変える風景」が創り出す、清冽な空間を感じる喜びが伝わってきます。自然と時の流れが自分の感性と一体となり描き続けられることを「生かしてもらっている」と表現する須田さんにとって、より強く心が動かされる渓谷を求めると、手つかずの天然林が残されている吉野川源流域の川上村へいざなわれるのはごく自然なことだったと語ります。

この作品は、水源地の森ツアーに参加した際に、清冽な源流だけではなく背景にある無垢な森をふと見上げた時に、「すごい。この森を描きたい」と思ったその感動を表現したもので、水源地の森ツアーガイドとして幾度も訪れる私たちでさえ、まるで明神谷に立っていると錯覚するほどでした。

思いを込める大切さ

私たちのツアーガイドは、その場に居る生き物を主役にするため、自然が育む生物多様性の魅力を現地でしか伝えることができます。しかし、自然が持つ魅力をキャンバスに写し取る須田さんの水彩画は、様々な場所で感動を伝えることができるため、多くの人に「その場に行きたい」と思ってもらうことができます。

言葉も絵と同じで、多くの人の共感を得るためには技術や経験を積み重ねて表現の幅を広げていかなければなりません。須田さんとの出会いによって、感性を磨き続ける努力と自らの感性に思いを込める大切さを学ぶことができました。



須田 泰一朗 1947年大阪府出身

公募美術団体 一水会会員
関西水彩画会常任委員

< 源流人会会員 >

河川の魅力の発信にと、昨年3月に豊かな川の表情を描いた8作品の展示協力をいただく

丹生川上神社上社

宮司 望月 康磨さん

時とつながる

”出会い“を大切に！そして、みんなが進む

丹生川上神社は白鳳4(675)年から、国の水司る祭祀が行われてきた神社です。今年はお祀りが始まって1350年の節目の年で、10月5日には記念行事が行われます。

望月宮司は14年前に就任以来、多くの参詣者でにぎわう神社にするべく様々なアイデアを形にしてくれました。歴史ある神社の「時」と「人」をつなげるその秘訣をお伺いしました。

勉強嫌いで「遊び」大好きから始まり

高校まで故郷、静岡で過ごした少年時代は「勉強嫌いで遊びが大好き」だったと宮司はふりかえります。実は教員だった父の影響で、教員を目指して入った大学でしたが、入学式で参拝した伊勢神宮の神職の所作に感動し、より多くの人とつながれるとも思い、神職を目指すことに。卒業後、安倍川沿いの静岡浅間神社で憧れの神職に就きましたが、神社が経営する結婚式場担当になり、ホテルの営業マンの様な仕事に。真に神様にお仕えしたいと転職した相模川沿いの寒川神社でも、組織体制の変更を機に離職し、故郷に戻りました。家庭の事情もあり「何でもやります」と



方々の神社へ就職活動に回りながら、送迎バスの運転手をしていた時「上社の宮司に」と声がかかりました。それは熱田神宮での神職の集会などに積極的に参加し、意見交換するなど、行動力で出来たご縁が大きかったのだと思います。悩

みましたが「呼ばれるうちが花だよ」と背中を押す母の言葉を聞き、思えば安倍川のはとりで生まれ育ち、浅間神社、寒川神社とも「川」の近くにある神社だったと人生をふりかえり、丹生川上神社上社も「川」に関わる神社であったことに縁を感じて上社への奉職を決断しました。

大切にしたい縁は大きな縁につながる

就任時は、村の人でさえ来てくれる人は少なく、まずは来てもらうにはと考えました。「御神酒あがらぬ神はなし」と思いついた境内での「天空のビアガーデン」をすぐ実施。集客、司会などは、営業マンの経験が役立ちました。縁が縁を呼び「にぎわい」の元になり、観月祭などにも活きています。今では「宮司は龍神様に呼ばれて上社に来たのですね」と言われるようになり「やってやろう」と励みになりました。例大祭では、森と水の源流館さん奉納の「源流の水」を大切にしたいと、参詣者自らガラス容器にこの水を入れて持ち帰ってもらうお守りにすると、翌年にも水を入れ替えて、友人、知人を誘って来るリピーターも増えました。

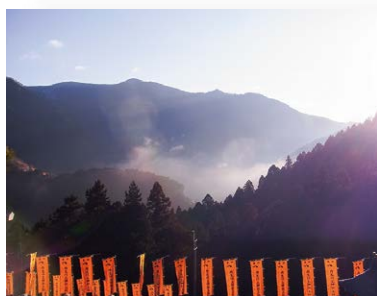
丹生川上神社は元々一社だったのが、今は上社、中社、下社と三社になっていて、縁も少なかったのです。そこで、宮司同士で話し合い、水を祀り、感謝する想いは一つと「三社めぐり」で特別な朱印和紙などを授ける企画が大ヒットし、参詣者が大きく増加しました。観光業者のツアーでは、大変な時も「断らない」ことを大切にしています。「気が合わない」人でも助けてくれたことがあり、縁の大切さを痛感しているからです。

みんなが広がる神社に

今の石の鳥居を川上村産の木の鳥居にしたい。木の鳥居はいつか朽ち果てるので建て替えが必要です。それを崇敬者にやってもらえる神社にしたいのです。そのためには、人がにぎわい続ける神社に、そして川上村にしなければなりません。みんなが協力して作った鳥居をぜひ見たいですね。次の節目の年には三社の社史を作ってほしいです。「野望」を実現すべく構想するのは楽しいですね。

自然とつながり、感謝の気持ちを

上社は大木があるわけでも、清流が近いわけでもありませんが、境内には四方に壮大な山々、大空、命を潤すダム湖を望め、雨上がりに山肌に現れる龍雲は神秘的です。日本の信仰は一神教ではなく、八百万の神様に感謝する自然崇拜が特徴です。ここは本当の自然を感じ、感謝の気持ちを持てる素晴らしい所なので、お気軽に足を運んでいただき、ぜひご縁でつながってほしいと思います。



本当の自然を感じられる眺め



いつか木の鳥居にしたい！

事業レポート

感じ、学び、考え、
行動する

私たちは、自然からの恩恵を得て暮らしています。そして地域では古くから自然の恵みを活かした営みや、恵みに感謝する祭りなどの文化が受け継がれてきています。これらを当館では自然・歴史・文化の分野から調査し、地域資源として保全・活用につなげられるよう日々活動しています。

森と水の源流館元館長

辻谷達雄さんお別れの会
11月16日

「達っちゃん」で親しまれた辻谷達雄さんが令和6年8月8日に享年91歳でご逝去されました。

達っちゃんは「百聞は一見に如かず、百見は一行に如かず」と川上村のフィールドを肌で感じ、学び、考え、行動する「源流学」を提唱し「水源地の村づくり」の現場で都市と源流をつなぐ先進的な取り組みに尽力されました。

その努力がまさに実を結び、平成26年11月16日、当時の天皇・皇后両陛下御臨席の下、川上村で「全国豊かな海づくり大会やまと」が開催されました。それを記念した「源流の日」であるこの日、館長として私たちスタッフを引っ張り、退任後も見守り、支え続けてくださった達っちゃんの追悼行事を挙行了しました。奇しくもこの日は百箇日で、ご家族も法要の後、駆けつけてくださいました。

当日は、源流の森シアターをメイン会場

に、大好きだった三之公「吉野川源流―水源地の森」を再現した源流の森ジオラマにご遺影を飾らせていただきました。送る言葉の後、116名の皆さんに白いカーネーションを献花いただきました。映像やスライドでも、その功績を振り返るとともに愛用の「ヨキ」や達っちゃん考案の吉野杉の「門杉」などを紹介。奇想天外な発想と創造力、行動力を懐かしみました。多くの方が集まり、楽しそうな思い出話の花が咲いているのを見て、天国の達っちゃんには喜んでいただけたのではないのでしょうか。メッセージボードには多くの寄せ書きをいただき、後日ご遺族に届けさせていただきました。



いっぱいメッセージをいただきました！
※当館ホームページより「ぼたり」21号「辻谷達雄館長勇退インタビュー」もぜひご覧ください。

「源流学」を引き継ぎ「自然への畏敬の念を忘れたらアカン！」との達っちゃんの想いをスタッフ一同大切に活動して参ります。お忙しい中、快くご協力いただいたご家族の皆様さま、ご参列の皆様さまには深く感謝申し上げます。ご参列がかなわなかった皆さまとともに改めて

「ありがとう達っちゃん！」

令和6年度調査報告会
2月1日

大学・行政機関等の協力のもと本年度に実施した調査結果を報告しました。

当財団法人の横田理事からも、異なる分野でも村づくりの観点では共通する課題もあり、良い報告会になったとの助言をいただきました。源流人会会員をはじめ流域や環境問題に関心のある皆様同士の新たな交流にもなった一日でした。

紀の川源流部に生息する大卵型カジカ
調査協力者
摂南大学応用生物科学科
講師 國島 大河氏



村に生息するカジカは、過去の記録も残されており、当時を知る漁業組合よりも関心が寄せられています。この調査を契機に、協働の保全活動に役立つことを期待します。

ニホンジカを利用した樹林更新
調査協力者
龍谷大学先端理工学部准
准教授 横田 岳人氏



皆様からいただいた森守募金を充て、ニホンジカとの共存という仮説のもと進める防鹿柵の実験（本号3頁参照）を進めています。同じ課題に取り組む奈良県フォレスト1の方々とともに一緒に活動できることを願っています。

井光地区の秋祭りと森との関わり
調査協力者
京都大学農学部森林科学科
助教 内藤 大輔氏



千本搗きの体験や伝統文化にふれながらの聞き取りは、住民の方々がかつての記憶を補充しやすい環境が生まれ、地域の活性化にもつながる手法として可能性が感じられた調査となりました。

地域住民の視点でみる川上村の自然
調査協力者
川上村自然観察研究会



専門家の視点を通すと、普段見慣れた風景にも川上村らしい、自然が観察できるといった会員の声も伝えられ、報告会を通じて新規加入の機会にもなりました。

森と水の源流館周辺の自然
発信協力者
(一社)かわかみ源流ツーリズム



ホテル杉の湯から森と水の源流館までの遊歩道にて、四季折々の花木や、おたき龍神湖、旧丹生川上神社跡などの見どころを盛り込んだマップを製作しました。見どころを発信する散策ツアーも企画中です。また、遊歩道の調査内容についてwebページ等で随時公開を予定しています。

源流人募集



年会費

個人 2,000円
家族 3,000円
学生 1,000円
団体 10,000円

郵便振替
00940-1-331163